経営とITをデザインする

先進コンサルタントの未来創造力

DXが企業経営の重要課題のひとつであることは論をまたない。だが、ブラックボックス化した既存システムを前に有効な手が打てない企業も多い。戦略なきDXからの脱却、技術起点による戦略構想、そして未来価値の最大化。数々の施策で実績を築くコンサルティング企業トップに打ち手を聞いた。

経営戦略とIT戦略を両輪に 真の意味でのDXを推進

経済産業省が「2025年の崖」という言葉を使い、日本企業のDXのゆくえに警鐘を鳴らしたのは6年前だった。レガシーシステム、すなわち老朽化・肥大化・複雑化して経営の足かせとなっている既存システムの課題を解決できない場合、その維持管理費の増大やデータ利活用の遅れにより、2025年以降、年に最大12兆円もの経済損失が生じる可能性があるとしたものだ。

この難局を乗り越え「デジタル戦略の勝者」となるには、経営戦略とIT戦略を一体に捉える発想が必要だと説いてきたのが、「経営とITをデザインする」をコンセプトに掲げるコンサルティング企業、フューチャーアーキテクトである。今春、社長に就任した谷口友彦氏はこう話す。

「今やデジタルを活用して企業変革を遂げなければ存続すら危ういという認識が浸透しています。背景にはAmazonやUberのようなデジタルディスラプターによる既存事業の破壊や、デジタル化の加速によって業界の垣根を越えた新たな競合が脅威としてあるためです。ですから、経営戦略はデジタル武装を前提に組み立てる必要があります。経営とITは不可分、もっと言えば経営戦略、業務改革、システム改革を三位一体で捉えることが競争優位性を高めるために重要だと考えます」

同社の源流は1989年創業のフューチャー社にあるが、当時から経営とITの両輪化を提唱。類例のないコンセプトでIT黎明期の課題解決を先導し、2002年にはITコンサルティング企業として初の東証上場を果たす。持株会社移行の際、そのコア事業を受け継ぎ誕生したのが、フューチャーアーキテクトだ。

目利き力と実装力を備え 業界を知悉するITコンサル

「戦略策定はDX成功の大前提ですが、さらに一歩進み、先端テクノロジーを起点に経営戦略や事業戦略を検討する姿勢も重要です。生成AIなどはその好例でしょう」

副社長の齋藤洋平氏はそう語る。そのために同社が実践し、また強みとして自任しているのが「目利き力」と「実装力」だという。目利きとは、世界中の最先端技術を常に評価・分析し、時代の流れや技術トレンドに合致した最適なものを選び、的確に組み合わせて顧客の課題解決に相応しいシステムアーキテクチャを設計すること。だから、特定の技術や製品に依存せず、事業成長を長期に支援するシステムをデザインできる。

「常にニュートラルな視点で最適な技術を見抜く。適切なものがなければ、自分たちで創り出す。そしてできるだけオープンな技術で汎用性を高めていく。そうすれば、最適なシステムが低コストで実現し、その後の維持管理はお客様で内製することも可能になります。これが私たちが創業以来受け継いできた、フューチャーのDNAです」（齋藤氏）

それには当然、目利きにも実装にも強い人材が必要であり、米スタンフォード大でいち早く深層学習を究めた齋藤氏を筆頭に、役員、コンサルタントがAIやロボティクスなどの先端ソリューションに通じている。同時に、戦略アドバイザーとして物流、金融、製造など多様な業界で蓄積してきた幅広い業務知識がコンサルティングの確度を上げる。SGホールディングスに出向し、業務の抜本改革や内製化などDXを牽引してきた谷口氏は、その象徴的存在といえそうだ。

「当社の強みは、一人ひとりのコンサルタントに、グランドデザインから要件定義・設計・開発、保守・運用までを一気通貫で推進できるスキルと業務知識があることです。構想を〝絵に描いた餅〟に終わらせず、価値を創出するまで伴走します。DXの文脈で内製化志向が高まるなか、実行の過程でお客様の自走力を高めるなど人材育成や組織づくりへの支援要請も増えています」（谷口氏）

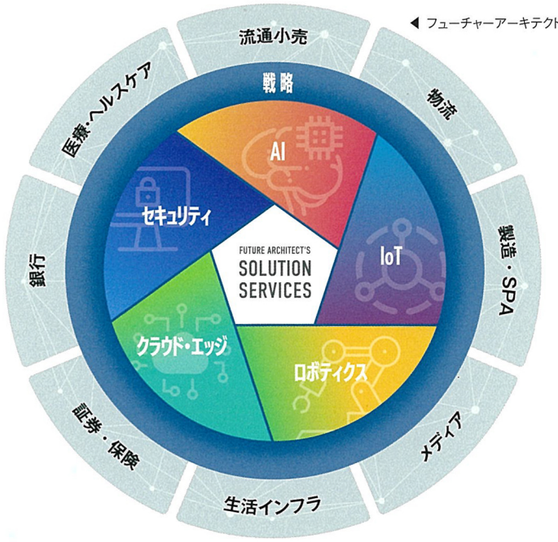
「未来価値の最大化」で 社会アジェンダ解決に挑む

では、その技術力とコンサルティングで顧客にどんな利益をもたらすのか。答えは「未来価値の最大化」にあると両氏は口をそろえる。

「お客様が抱える今現在の課題解決だけがゴールではありません。3年後、5年後の業界の事業環境を常に予測し、仮説に基づいて変化に柔軟に対応できる戦略的なシステムを実現する。適切なIT投資によって生まれた余力を未来への推進力に換えていく。そういう戦略をお客様と共に描けるパートナーでありたいと願っています」

同社が物流業界の輸送増大とドライバー不足を見越して10年来推進してきた物流DXは、その代表例だ。今夏には金融基幹業務をフルクラウドで動かす業界初の次世代バンキングシステムを稼働。維持・保守中心だったシステム投資を戦略志向に換えるDXとして注目されている。

そうした未来創造型DXコンサルティングの先には間違いなく、個社の経営課題解決を超えた社会課題への貢献がある。



◀ フューチャーアーキテクトのソリューション・サービス

谷口友彦 TANIGUCHI Tomohiko

2002年に現フューチャー入社後、コンサルタントとして流通業や物流業の基幹システム刷新プロジェクトで実績を積み、SGホールディングスに出向。同社DX戦略担当執行役員、佐川急便取締役、SGシステム代表取締役社長を兼任し、約8年にわたりデジタル戦略を牽引。2024年3月より現職。

齋藤洋平 SAITO Yohei

2001年に現フューチャー入社。R&D部門でシステム刷新プロジェクトの全体アーキテクチャ設計やエンジニアリング推進等をリードし、2010年から全社横断技術部門の責任者に。米スタンフォード大学客員研究員を経て、2018年取締役最高技術責任者（CTO）就任。2024年3月より現職。

FUTURE ARCHITECT
フューチャーアーキテクト株式会社
東京都品川区大崎1-2-2
アートヴィレッジ大崎セントラルタワー
https://www.future.co.jp/architect/

Wedge10月号（2024.9.20発行）掲載